



Title	『墨子』における「執無鬼者」
Author(s)	菊池, 孝太郎
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2026, 59, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104623
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『墨子』における「執無鬼者」

菊池 孝太郎

キーワード…『墨子』／墨家／明鬼／鬼神観

一、はじめに

戦国期に活躍した思想家集団の墨家には、その活動を裏付ける重要な思想があり、それらは「十論」と呼称されている。墨家思想の基軸となったのは、兼愛説・非攻説であったが、その他にも墨家は、教団内部の規律の維持や、墨家の主張を現実社会に適応させるための論理として、天志説と明鬼説とを提唱した。⁽¹⁾

「天志」とは、天の意志のことである。天志説では、天は義を願い不義を悪む主宰者的存在とされ、この義の有無によって天は人間に賞罰をもたらし、人々の寿夭・貧富・治乱を左右するとされた。よって墨家は、この天志を明察して、天志に順い、天の義を実現すべきことを主張した。「明鬼」とは、鬼神の存在や鬼神の明知を明らかにすることである。墨家は、鬼神を天神、山川の神々、人間の霊魂とみなし、これらの諸神霊の存在することを説いた。鬼神は賢を賞し暴を罰するものであり、天下の利をおこし天下の害を除くためには、鬼神の存在を明らかにする必要がある

あつたためである。このように墨家は天や鬼神といった超自然的存在の实在を想定し、これらのもたらす賞罰によって教団内や国家の秩序の維持を図つたと考えられる。

一方、こうした墨家の天志説・明鬼説に対して批判・反論を行った無鬼論者は、すでに墨子の時代には存在していたようである。彼らは、『墨子』明鬼下篇では「執無鬼者」として登場し、墨子の明鬼説について疑義を呈している。明鬼下篇は、こうした「執無鬼者」の疑問に対して墨子が反論を行うという問答形式であることから、「執無鬼者」は特定の人物というよりも、明鬼説の正当性を主張するために仮想された架空の人物であると考えられる。⁽²⁾ただ、こうした「執無鬼者」が墨子の周辺に全くいなかったかと言えば、そうではなからう。実際に墨子の周辺に明鬼説に疑義を唱える「執無鬼者」が存在していたことは、耕柱篇・公孟篇などの説話類の記述から確認できるのである。

そこで、本稿では、まず、『墨子』内における「執無鬼者」の言説として、明鬼下篇の記述を確認する。そして、「執無鬼者」が如何なる立場に属する者であったのか、また、「執無鬼者」の主張は如何なるものであったのかについて、耕柱篇・公孟篇・魯問篇などの『墨子』説話類の記述から明らかにしたい。

二、『墨子』明鬼下篇における「執無鬼者」

『墨子』明鬼下篇は、「執無鬼者」が鬼神の存在や鬼神祭祀の必要性について否定的に論じ、それに対して墨子が回答するという形式を取る。こうした明鬼下篇における「執無鬼者」の記述から、無鬼論者の立場やその主張を明らかにしたい。⁽³⁾

では、明鬼下篇に見られる「執無鬼者」の記述を以下に示そう。なお、本稿では、明鬼下篇の文章を列挙する上

で、便宜上通し番号を付している。

- ① 今、無鬼を執る者曰く、「鬼神は、固より有る無し」と。且暮に以て天下に教誨し、天下の眾を疑わしむるを爲す。⁽⁴⁾

明鬼下篇の冒頭に、墨子は天下が乱れる原因として、人々が鬼神の存在の有無について疑惑を持ったことで、鬼神の「賞賢罰暴」の力を理解できなくなったためであると説く。そして、人々がそのような思考に陥っている原因として、墨子は、「執無鬼者」による鬼神の存在を否定する言説を取り上げる。そこで、こうした「執無鬼者」への反論として、墨子は鬼神の存在を明らかにするための方法を述べる。それは、実際に天下の多くの人が耳目で鬼神を見聞したかを調査し、それを存在の有無の基準にするというものである。⁽⁵⁾つまり、もし、実際に鬼神を見聞した者がいれば、鬼神の存在は確定できるといった至極単純な道理であるのだが、これに対して「執無鬼者」は次のように質問する。

- ② 今無鬼を執る者言いて曰く、「夫れ天下の鬼神の物を聞見すと爲す者、勝げて計るべからざるなり。亦た孰れか鬼神有無の物を聞見すと爲すや」と。⁽⁶⁾

墨子の鬼神の有無を明らかにする方法に対して、「執無鬼者」は、鬼神を実際に見聞した者がいるだろうか、と質問する。これに対して墨子は、鬼神の存在を記した史書の記述をいくつか取り上げ、鬼神が存在していた証拠とする。

一例として、墨子は周の宣王と杜伯の説話を取り上げる。宣王は臣下の杜伯を無罪の罪で処刑したが、その死に際し杜伯は「自分に罪はない。もし死後に靈知があるとすれば、三年のうちに必ず我が君に知らしめよう」と言った。その三年後、諸侯とともに狩獵を行った宣王は、衆人觀衆の目前で杜伯の靈に射殺された。この出来事は周の『春秋』に記録され、罪のない者を殺害すると、不祥を得て鬼神の罰を被ると戒められたという。⁽⁷⁾

また、一例として、墨子は秦の穆公の説話を取り上げる。穆公が日中に廟にいと、人面鳥身の神が門に入ってきた。神は穆公に対して、「上帝は汝の明德を受けて、汝に寿命十九年を更に与え、汝の国家を繁榮させ、子孫を絶えることなく盛んにさせよ、と私に言いつけられた」と述べた。この神は自身の名を句芒と名乗ったという。⁽⁸⁾

これらの説話は単に鬼神の存在を示すのみならず、不善を為した宣王は鬼神の災禍を被ったのに対して、善を為した穆公が鬼神の祝福を受けたように、天志説・明鬼説に貫通する「賞賢罰暴」の思想を明示している。このように、墨子は史書の記述に基づき、鬼神存在の証拠を提示したが、これに対して「執無鬼者」は次のように反論する。

- ③ 今無鬼を執る者曰く、「夫れ眾人耳目の請は、豈に以て疑いを斷ずるに足らんや。奈何ぞ其れ天下に高士君子爲らんと欲して、復た眾の耳目の請を信ずること有らんや」と。⁽⁹⁾ 子墨子曰く、「若し眾の耳目の請を以て、以て信ずるに足らずと爲し、以て疑いを斷ぜざれば、識らず、昔者三代の聖王堯舜禹湯文武の若き者は、以て法と爲すに足るか」と。

「執無鬼者」は、衆人の耳目に基づく情報などは、曖昧模糊なものであるため信用に足らないとして、鬼神の存在を疑問視する。この反論に対して、墨子は、衆人の耳目は頼りにならないとしても、堯舜禹湯文武ら夏殷周三代の聖

王のことであれば根拠になるとし、これら聖王が鬼神の存在を認めていたことを取り上げて、鬼神の存在の根拠とする。墨子は、古の聖王が賞罰を決める際に必ず祖廟で行っていたのは、聖王たちが鬼神に賞罰を告げていたためであると⁽¹⁰⁾する。また、古の聖王たちは鬼神に事えることを政務の第一としており、それが後世廃れないように、書物に記録を書き残したと説く。⁽¹¹⁾よって墨子は、鬼神が存在しないという「執無鬼者」の思考が、聖王の政務に反するものであり、それは君子の道に反するものであると論じているのである。

④ 今無鬼を執る者の言に曰く、「先王の書、聖人の言、一尺の帛、一篇の書、語って鬼神の有を數^{しば}し、重ねて有^{また}之れを重ぬとは、亦た何れの書に之れ有るや」と。子墨子曰く『周書』大雅に之れ有り。……⁽¹²⁾と。

墨子は、聖王が鬼神の存在することを書物に記録したと説いたが、それについて「執無鬼者」はその記録の典拠を求める。これに対して墨子は、夏殷周三代の聖人の言葉を『書』から引用し、鬼神が存在することの証拠としている。

この①―④までは、鬼神の存在の有無に関する議論であり、鬼神は存在しないと⁽¹³⁾する「執無鬼者」に対して、墨子は自身の歴史主義に基づき、聖王の事跡をもとに反論を行った。アンヌ・チャンは、墨子は論証において、ほぼ強迫的ともいえる執拗さで、その意見に十分な根拠があることを証明しようとしていたと述べる。また、墨子は言説の妥当性を判断する際に、「三表」（三つの基準）を用いていた。「三表」については『墨子』非命上篇に記述があり、それによると、根本（古の聖王の事跡に基づくこと）・原因（人々が見聞した現実を原因とすること）・実用性（刑罰と政治を實踐して、それが国中の人々の利益に合致するかどうかを確かめること）⁽¹⁴⁾であるという。こうした墨子の

歴史主義に基づく判断基準は、明鬼下篇の「執無鬼者」に対する反論の根拠としても用いられていたようである。

さて、①―④の議論で手詰まりとなった「執無鬼者」は、一歩下がったかのように、次の⑤⑥では鬼神信仰や鬼神祭祀の実用性についての議論へと転換する。つまり、鬼神という存在が現実世界において何の役にたつのか、という問題に話題を変更したのである。

⑤ 今無鬼を執る者曰く、「意そも親の利に中らずして、孝子爲ることを害するか」と。⁽¹⁵⁾

⑥ 今無鬼を執る者言いて曰く、「鬼神は固より請まに有る無し。是を以て其の酒醴黍盛犠牲の財を供えず。吾れ乃ち今其の酒醴黍盛犠牲の財を愛しむに非らざるか、其の得る所の者は將はた何ぞや。此れ上は聖王の書に逆らい、内は民人孝子の行いに逆らう。而るに天下に上士爲らんとせば、此れ上士爲るの道に非く所以なり」と。⁽¹⁶⁾

⑤の「執無鬼者」は、鬼神に対する信仰や祭祀は、現実世界における生活を圧迫するものであり、それは親族の利益を第一とする孝子の道を阻害することになると主張する。これに対して墨子は、古今鬼神には天にいる鬼神・山川の鬼神・人が死してなる鬼神の三種があり、人が死してなる鬼神には、自身の祖先父母の鬼神も含まれているため、祭祀を通じて鬼神に事えることは父母に事えることも同義であると論じるのである。⁽¹⁷⁾

⑥の「執無鬼者」は、鬼神は存在しないものであるとして、鬼神に対して供物を捧げる祭祀は無駄であるとし、こうした無駄な行為は聖王の教えや孝子の道に反するものであると主張する。これに対して、墨子は、鬼神への祭祀は無駄なものではなく、鬼神の祝福を求めることや、祭祀を通じて郷里の親睦をはかるうえで重要な行為であると論じ

る。また、前述したように、鬼神は自身の祖先の霊であるため、祭祀における供物の申奉は、孝子の道に通じるとするのである。⁽¹⁸⁾

以上、明鬼下篇における「執無鬼者」の主張と、それに対する墨子の回答を概観した。では、これら「執無鬼者」たちは、なぜ鬼神の存在を否定する立場にいたのであろうか。①―④の「執無鬼者」は、鬼神の存在を否定しているが、彼らがそのような思考に至った経緯については記されていない。

一方、⑤⑥の「執無鬼者」は、墨子の明鬼説の弊害として、「親の利に中らず」「孝子爲ることを害す」「上は聖王の書に逆らい、内は民人孝子の行いに逆らう」を挙げており、鬼神信仰及び鬼神祭祀が現実の人間関係に悪影響をもたらすと説いている。また、⑤⑥の「執無鬼者」は、「親之利」「孝子」という語を主張していることから、これらは儒者を想定していたと考えられる。ただ、⑤の「執無鬼者」は、儒者でありながら、鬼神が自身の祖先であることを理解していない。恐らく、当時、墨子の明鬼説を批判していた儒者の中には、墨家の明鬼説の真意を深く知らずに、「淫祀邪教」（祀るべきでない鬼神をみだらに祀る邪な教え）の説と表面的に捉えて、批判した者たちがいたのではないだろうか。こうした儒者を生み出した背景には、孔子以来の「怪力乱神を語らず」「鬼神を敬して之れを遠ざく」の人事重視・民生安定の志向が根付いていたためであると推測される。

⑥の「執無鬼者」も、「孝子」の重要性を説いているが、こちらは鬼神祭祀の供物の必要性について批判している。こうした祭祀における供物の意義性・必要性に関する議論は、無鬼論者の中では特に重視されていたようである。例えば、王充の『論衡』祀義篇では、「今祭る所は死人、死人知る無く、飲食する能わず。何を以て其の飲食を歆享する能わざるを審らかにするや」と述べ⁽¹⁹⁾、知覚のない鬼神のために祭祀に供物を捧げることの無意味さを説いている。そもそも、この祀義篇自体が、鬼神祭祀を行うことで恩恵を得られると信仰に対し、死者に知覚作用は無く、また飲

食もしないことを説き、鬼神のために供物を奉ずる祈祷祭祀を批判する目的で作られた篇である。また、『論衡』薄葬篇では、「實を失えるの議は以て教え難く、愚民の欲を得ると雖も、知者の心に合せず、物を喪いて用を索し、世に益する無し。此れ蓋し墨術の傳わらざる所以なり」と述べ、墨家の事実には合わない明鬼説は人を教化できず、無知の欲望を満足させるだけで、知者の心に合致せず、祭祀や葬儀のために財物を使い果たすので、無益の産物であると痛烈に非難している。この薄葬篇は、墨家の薄葬は経済的に利があるとしつつも、鬼神の存在を認める明鬼説がある以上、結果的に人々は鬼神の幸福を得るために祭祀や葬儀を豪勢にしようということを読み、墨家の論理を批判した篇である。つまり、王充のような無鬼論者にとって、民生に直結する祭祀の供物をなくすこと、その祭祀の挙行対象である鬼神の存在を否定することは、喫緊の課題であったのである。

以上のように、明鬼下篇における「執無鬼者」は、鬼神の存在を否定して、さらに鬼神の明知や鬼神祭祀の実用性に対する疑念を抱いていたようである。また、これら「執無鬼者」は、儒者を想定していたと考えられる。儒者たちが墨子の明鬼説を批判した背景には、儒家の人事重視・民生安定の志向に基づき、人々を惑わして、浪費を招く鬼神祭祀を否定する目的があったのだろう。

三、『墨子』説話類における「執無鬼者」

『墨子』の説話類である耕柱・公孟・魯問等の諸篇には、墨子の明鬼説に対して疑義を唱えた人物と、それに反論する墨子のやりとりが収録されている。これら諸篇の記述を概観することで、明鬼下篇の「執無鬼者」が如何なる立場に属する者であったか、また「執無鬼者」の鬼神に対する疑念は何に依拠して提唱されたものであったのかについて

て検討する。

では、『墨子』説話類の明鬼説に関する記述を以下に示そう。なお、前章と同様に、文章を列挙する上で、便宜上通し番号を付している。

① 巫馬子、子墨子に謂いて曰く、「鬼神は聖人の明智に孰いすれ與ぞ」と。子墨子曰く、「鬼神の聖人より明智なるは、猶お聰耳明目の聲ろうこ瞽おに與おけるがごときなり。……」と。⁽²¹⁾

①では、巫馬子なる者が墨子に鬼神と聖人の明知の差について質問している。蘇時学『墨子刊誤』によると、巫馬子は儒者であり、孔子の弟子の巫馬期か、その子孫であるという。⁽²²⁾ 人事を重視する儒者にとつて、聖人は尊崇の対象であるが、墨子はその聖人よりも鬼神の明知は遙かに優れているとして、鬼神を尊崇することを説いている。

② 公孟子、子墨子に謂いて曰く、「義不義有り、祥不祥無し」と。子墨子曰く、「古の聖王は皆な鬼神を以て神明にして、而く禍福を爲すと爲して、祥不祥有るを執る。是を以て政治まりて國安らかなり。……」と。⁽²³⁾

③ 公孟子曰く、「鬼神無し」と。又曰く、「君子必ず祭禮を學ぶ」と。子墨子曰く、「無鬼を執りて祭禮を學ぶ。是れ猶お客無くして客禮を學ぶがごときなり。是れ猶お魚無くして魚苦を爲るくがごとし」と。⁽²⁴⁾

②③は、儒者の公孟と墨子との問答である。②は、鬼神が人間の行いに応じて吉凶禍福を決めるとする墨子の主張

を否定するものである。これは孔子・孟子が唱えた天に対する定命論（宿命論）と、人間は自己の努力次第で監視者である天や鬼神からの祝福が得られるとする非命説との相違による対立であろう。こうした公孟の批判に対して墨子は、前述した明鬼下篇と同様に、古の聖王は鬼神に吉凶禍福を決める神明があると見なしていたという、古代の判例を持ち出して反論している。③は、鬼神の存在を否定しつつも、一方で祭祀の礼を学ぶことを説いた公孟に対する反論である。儒家の人事重視の志向によって、祭祀の意義を喪失してしまった公孟に対して、墨子は「客がいないのに客礼を学ぶようなものであり、魚がいないのに魚を捕る網を作るようなものである」と痛烈に批判している。

④ 子墨子、程子に謂いて曰く、「儒の道、以て天下を喪うに足る者、四政あり。儒は天を以て不明と爲し、鬼を以て不神と爲し、天鬼説はず。此れ以て天下を喪うに足る。……」⁽²⁵⁾

④では、墨子は程子なる人物と、儒者の政治の欠点について対話している。墨子は儒者の欠点として、天の明知と鬼神の力とを無視していることを挙げる。前述した公孟のように、墨子の明鬼説に反する儒者が当時多く存在していたのだろう。程子は、三弁篇では「程繁」と称されており、墨子のことを「先生」と称していることから墨子の門人であったと思われる。ただ、墨子と程子との対話は、いずれも儒者の教義についてであるため、孫詒讓は、「詒讓案するに、公孟篇亦た程子に作る。蓋し儒墨の學を兼治する者なり」と述べ、程子を儒墨兼修の人と見なしている。この程子のように儒墨は完全な水と油の関係ではなかったようで、春秋戦国期にはこうした学派を超えた交流が行われていたことが窺える。

⑤ 子墨子の門に遊ぶ者有り。子墨子に謂いて曰く、「先生は鬼神を以て明知と爲し、能く禍福と爲す。善を爲す者は之れに富し、暴を爲す者は之れに禍す。今吾れ先生に事うること久し、而るに福至らず。意うに先生の言不善有るか。鬼神不明なるか。我何の故に福を得ざるや」と。⁽²⁷⁾

⑥ 子墨子疾有り、跌鼻進みて問いて曰く、「先生鬼神を以て明と爲し、能く禍福を爲す。善を爲す者は之を賞し、不善を爲す者は之を罰す。今先生聖人なり、何の故に疾有り。意うに先生の言に不善有るか。鬼神明知ならざるか」と。⁽²⁸⁾

⑦ 子墨子、曹公子を宋に出えしむ。三年にして反り、子墨子を睹て曰く、「……今にして夫子の故を以て有家始めより厚きなり。有家厚く、謹んで鬼神を祭祀す。然り而して人徒多く死に、六畜蕃せず、身は病に湛む。吾れ未だ夫子の道の用うべきを知らざるなり」と。⁽²⁹⁾

①—④は儒者からの明鬼説に対する批判であったが、⑤⑥は、墨子の門人が鬼神の明知に対して疑義を呈したものであり、⑦は墨子の門人が鬼神祭祀の効用について疑義を呈したものである。

まず、⑤では、墨子の門人が墨子に対して、「先生は、鬼神には明知があり、人に禍福を与えられております。善を爲す者には幸福を、暴を爲す者には災禍を与えるとされます。私は先生に長い間師事しているのに、幸福がやってきません。思うに、先生の言葉に不善があるのでしょうか。鬼神が不明なのでしょうか。私はなぜ幸福を得られないのでしょうか」と質問する。これに対して墨子は、門人には隠している罪があるとして、罰を受ける道理はあつて

も福を得られるはずがないと論じる。⁽³⁰⁾

また、⑥では、病気になった墨子に対して、門人の跌鼻なる人物が、「先生は、鬼神には明知があり、人に禍福を与えるとしております。善を為す者には幸福を、暴を為す者には災禍を与えるとされます。先生は聖人であるのに、どうして病気になられたのでしょうか」と尋ねる。これに対して墨子は、病気になる理由は沢山あって、鬼神の不明によってなるものではないと論じる。⁽³¹⁾

さらに⑦では、宋に仕官させた門人の曹公子なる人物が、帰国した後に墨子に面会して、「入門した時は貧しかったが、先生のおかげで、家は豊かになり、慎んで鬼神を祭祀しています。なのに、家中の者が亡くなり、家畜は繁殖せず、私も病にかかりました。私は先生の鬼神の道が何の役にたつのが分かりません」と、鬼神祭祀の効用について疑問を投げかける。墨子は、曹公子が高い地位にありながら賢者にその地位を譲らないことや、財貨を多く得ているながら貧者に分配しないといった私利私欲に基づく行動が、鬼神の望むところと反するために、鬼神の幸福を得ることができないと論じるのである。⁽³²⁾

このように、墨子の門人の中にも鬼神の明知や鬼神祭祀の効用について疑念を抱く者はいたようである。では、墨家に属していながら、その墨家の教義を疑う者がいたというのは、どのように解釈すべきであろうか。これについて浅野裕一は、墨子のもとに集まってきた弟子達の入門動機は、ほとんどの場合が墨子のもとで学問を身につけ、高級官僚として諸国に仕官したいとする一点にあって、墨子の思想に感銘を受けたものではなかったと論じている。⁽³³⁾つまり、理想実現のために学団を創設した墨子と、利益目当てに入門してきた弟子達とは、その思惑がはじめから食い違っていたのである。浅野は、こうした録位獲得・功利追求の弟子達の質的教化の方策として、鬼神信仰が用いられたと説いている。ただこうした方便的な鬼神信仰による矯正では、完璧な教化には及ばず、⑤―⑦の門人のように鬼

神の明知に疑念を抱く者も多かったのである。

これら説話類に見られる明鬼説に関する議論において、儒者が墨子の論敵として登場しているように、明鬼下篇の「執無鬼者」はやはり儒者を想定していたと考えられる。儒者の神秘を排して人事を優先する立場や、人間は先天的に命が定まっているとする定命論が、墨子の明鬼論とは相容れなかったためであろう。一方、説話類において墨子の明鬼説に疑義を唱えた⑤―⑦が墨子の門人であったように、「執無鬼者」にはこれら墨子の門人たちも含んでいたと考えられる。また、明鬼下篇の「執無鬼者」が鬼神の存在に対して否定的であったのに対して、説話類における論者たちは、③の公益を除いて、いずれも鬼神の存在は認めていた。彼らの疑惑の対象は、主に鬼神の明知と鬼神祭祀にあつたようである。

四、おわりに

本稿では、『墨子』明鬼下篇における「執無鬼者」が如何様な人物であったのか、また、「執無鬼者」の主張は如何様なものであつたのかについて、『墨子』明鬼下篇及び説話類の記述を概観し、以下の結論を得ることができた。

まず、『墨子』明鬼下篇の「執無鬼者」は、恐らく実際に墨家が対立していた儒者が想定されていたと考えられる。その裏付けとして、『墨子』説話類には儒者が登場しており、これら儒者は儒家の人事重視の志向や定命論に基づき、墨子の明鬼説に疑義を呈している。

一方、墨子の明鬼説に疑念を抱いたのは、他学派の儒者だけではなかった。『墨子』説話類に登場する墨子の門人たちは、自己の利益追求のために、鬼神の明知や鬼神祭祀の意義性について疑義を呈していたようである。こうした

私利私欲のために鬼神を利用する門人たちも、『墨子』明鬼下篇における「執無鬼者」に内包されていたと推測される。明鬼説は本質的には門人教化のための方便の意味合いが強かったため、こうした明鬼説に疑念を抱いた墨者たちは、墨子没後も存在していたのであろう。

本稿では紙幅の都合上紹介できなかったが、近年、墨家思想に関する出土文献もいくつか発見されている。⁽³⁴⁾ こうした墨家系出土文献の中には、上博楚簡『鬼神之明』に表れた鬼神の明知に対する疑念や、清华簡『邦家之政』『治政之道 治邦之道』に表れた過度な鬼神祭祀の挙行に対する戒告のように、明鬼説に対して疑義を内包しているかのような記述が存在する。これら出土文献の存在は、墨子没後以降の墨家の活動を示すとともに、墨子没後以降の墨家でも、明鬼説においては思想的に一枚岩でなかったことを物語っている。

本稿で確認した『墨子』の「執無鬼者」が、これら墨家系出土文献や、後の王充に代表される無鬼論者などと、如何なる影響関係にあったのかという考察は、今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) 山邊進「墨子」の天について―伝統的天観との比較を中心として―(『東方学』第八十四号、一九九二年)によると、墨家の天観は天の賞罰論が中心に構成されており、また、天は常に社会の安寧を希求し、下土の状態によって賞罰を降すという殷周時代の伝統的天観と一致するという。また、墨家が天の主張を必要とした要因として、(一)天を持ち出すことで自家の主張を正当化するため、(二)自家の思想を現実社会に向けて主張する際に、その閉鎖性が大きな障害とならないように公の論理として天の存在を利用するためであったとする。

- (2) 例えば、非攻中篇「節攻戰者」や非攻下篇「好攻伐之君」なども、誰か具体的な人物がいたというわけではなく、墨子が非攻

説を正当化するために設けられた質問者と見なすべきであろう。

- (3) 本稿では『墨子』本文について、孫詒讓撰『墨子問詁』上下巻(中華書局、二〇〇一年)を底本にしつつ、訓読及び解釈については、牧野謙次郎『墨子国字解』(漢籍国字解全書所収、早稲田大学出版会、一九二一年)、小柳司氣太『墨子問詁』(漢文大系、富山房、初版一九一三年、増補版一九七五年)、山田琢『墨子』上下巻(新釈漢文大系、明治書院、一九七五・一九八七年)を参考にした。また、『墨子』の原文には異同が多いため、本稿で掲載する『墨子』の原文に関しては、『墨子問詁』の校注によって改めたものとする。

- (4) 今執無鬼者曰、「鬼神者、固無有」。且暮以爲教誨乎天下、疑天下之眾。(『墨子』明鬼下篇)
- (5) 子墨子曰、是與天下之所以察知有與無之道者、必以眾之耳目之實知有與亡、爲儀者也。請惑聞之見之、則必以爲有。莫聞莫見、則必以爲無。(『墨子』明鬼下篇)
- (6) 今執無鬼者言曰、「夫天下之爲聞見鬼神之物者、不可勝計也。亦孰爲聞見鬼神有無之物哉」。(『墨子』明鬼下篇)
- (7) 周宣王殺其臣杜伯而不辜。伯曰、「君殺我而不辜。死者爲無知則止矣。死而有知、不出三年、必使吾君知之」。其三年、周宣王合諸侯而田於圃、……日中、杜伯乘白馬素車、朱衣冠、執朱弓、挾朱矢、追周宣王、射之車上。中心折脊、殪車中、伏殺而死。當是之時、周人從者莫不見、遠者莫不聞。著在周之春秋。爲君者以教其臣、爲父者以讖其子、曰、「戒之慎之。凡殺不辜者、其得不祥、鬼神之誅、若此之懼邈也」。(『墨子』明鬼下篇)
- (8) 昔者秦穆公、當晝日中處乎廟、有神入門而左。人面鳥身、素服玄純、面狀正方。……神曰、「無懼。帝享女明德、使予錫女壽十年有九、使若國家蕃昌、子孫茂、毋失。鄭穆公再拜稽首曰、「敢問神名」。曰、「予爲句芒」。(『墨子』明鬼下篇)
- (9) 今執無鬼者曰、「夫眾人耳目之請、豈足以斷疑哉。奈何其欲爲高士君子於天下、而有復信眾之耳目之請哉」。子墨子曰、「若以眾之耳目之請、以爲不足信也、不以斷疑、不識。若昔者三代聖王堯舜禹湯文武者、足以爲法乎」。(『墨子』明鬼下篇)
- (10) 古聖王、其賞也必於祖、其僂也必於社。賞於祖者何也。告分之均也。僂於社者何也。告聽之中也。(『墨子』明鬼下篇)
- (11) 古者聖王必以鬼神爲有、其務鬼神厚矣。又恐後世子孫不能知也、故書之竹帛、傳遺後世子孫。(『墨子』明鬼下篇)
- (12) 今執無鬼者之言曰、「先王之書、聖人一尺之帛、一篇之書、語數鬼神之有、重有重之、亦何書之有哉」。子墨子曰、「周書大雅有之。……」。(『墨子』明鬼下篇)

- (13) アンヌ・チャン著、志野好伸・中島隆博・廣瀬玲子訳『中国思想史』（知泉書館、二〇一〇年）七七頁。
- (14) アンヌ・チャン著、志野好伸・中島隆博・廣瀬玲子訳『中国思想史』（知泉書館、二〇一〇年）七八頁。
- (15) 今執無鬼者曰、「意不中親之利、而害爲孝子乎」。(『墨子』明鬼下篇)
- (16) 今執無鬼者言曰、「鬼神者固請無有。是以不共其酒醴粢盛犧牲之財。吾非乃今愛其酒醴粢盛犧牲之財乎、其所得者將何哉。此上逆聖王之書、內逆民人孝子之行、而爲上士於天下、此非所以爲上士之道也」。(『墨子』明鬼下篇)
- (17) 子墨子曰、「古今之爲鬼、非他也。有天鬼、亦有山水鬼神者、亦有人死而爲鬼者。……今絜爲酒醴粢盛、以敬慎祭祀。若使鬼神請有、是得其父母奴兄而飲食之也。豈非厚利哉。……」。(『墨子』明鬼下篇)
- (18) 子墨子曰、「今吾爲祭祀也、非直注之汙壑而棄之也。上以交鬼之福、下以合驩聚眾、取親乎鄉里。若神有、則是得吾父母兄姪而食之也。則此豈非天下利事也哉」。(『墨子』明鬼下篇)
- (19) 今所祭死人、死人無知、不能飲食。何以審其不能欲享飲食也。(『論衡』祀義篇)
- (20) 失實之議難以教、雖得愚民之欲、不合知者之心、喪物索用、無益於世。此蓋墨術所以不傳也。(『論衡』薄葬篇)
- (21) 巫馬子謂子墨子曰、「鬼神孰與聖人明智」。子墨子曰、「鬼神之明智於聖人、猶聽耳明目之與聾瞽也。……」。(『墨子』耕柱篇)
- (22) 巫馬子爲儒者也。疑即孔子弟子巫馬期、否則其後。(蘇時學『墨子刊誤』)
- (23) 公孟子謂子墨子曰、「有義不義、無祥不祥」。子墨子曰、「古聖王皆以鬼神爲神明、而爲禍福、孰有祥不祥、是以政治而國安也。……」。(『墨子』公孟篇)
- (24) 公孟子曰、「無鬼神」。又曰、「君子必學祭禮」。子墨子曰、「執無鬼而學祭禮、是猶無客而學客禮也、是猶無魚而爲魚罟也」。(『墨子』公孟篇)
- (25) 子墨子謂程子曰、「儒之道、足以喪天下者、四政焉。儒以天爲不明、以鬼爲不神、天鬼不說。此足以喪天下。……」。(『墨子』公孟篇)
- (26) 詒讓案、公孟篇亦作程子。蓋兼治儒墨之學者。(『墨子問詒』三弁篇)
- (27) 有游於子墨子之門者。謂子墨子曰、「先生以鬼神爲明知、能爲禍福。爲善者富之、爲暴者禍之。今吾事先生久矣、而福不至。意者先生之言有不善乎。鬼神不明乎。我何故不得福也」。(『墨子』公孟篇)

- (28) 子墨子有疾、跌鼻進而問曰、「先生以鬼神爲明、能爲禍福。爲善者賞之、爲不善者罰之。今先生聖人也、何故有疾。意者先生之意有不善乎。鬼神不明知乎」。(『墨子』公子孟篇)
- (29) 子墨子出曹公子於宋。三年而反、睹子墨子曰、「……今而以夫子之故、家厚於始也。有家厚、謹祭祀鬼神。然而人徒多死、六畜不蕃、身湛於病。吾未知夫子之道之可用也」(魯問篇)
- (30) 子墨子曰、「匿一人者猶有罪。今子所匿者若此其多。將有厚罪者也。何福之求」。(『墨子』公子孟篇)
- (31) 子墨子曰、「雖使我有病、鬼神何遽不明。人之所得於病者多方。有得之寒暑。有得之勞苦。……」。(『墨子』公子孟篇)
- (32) 子墨子曰、「……今子處高爵祿而不以讓賢、一不祥也。多財而不以分貧、二不祥也。今子事鬼神唯祭而已矣、而曰「病何自至哉」。是猶百門而閉一門焉、曰「盜何從入」。若是而求百福於有怪之鬼神、豈可哉」。(『墨子』魯問篇)
- (33) 淺野裕一『墨子』(講談社學術文庫、一九九八年)二五六―二六四頁。
- (34) 『鬼神之明』は『上海博物館藏戰國楚竹書』第五分冊に、『邦家之政』は『清華大學藏戰國竹簡』第八分冊に、『治世之道』は『清華大學藏戰國竹簡』第八分冊に、『治邦之道』は『清華大學藏戰國竹簡』第九分冊にそれぞれ収録されている(『治政之道』治邦之道は、当初『治政之道』と『治邦之道』という別個の文献として扱われていたが、後の研究の進展によって連続した一個の文献であることが判明し、『清華大學藏戰國竹簡』第九分冊の附録にその合本の釈文が収録されている)。なお、『鬼神之明』が墨家の後学による著作である可能性については、拙稿「中国古代の楚地における鬼神観の考察―上博楚簡『鬼神之明』凡物流形』を手がかりにして―」(『中国研究集刊』第六十六号、二〇二〇年)に指摘している。また、浅野裕一「清華簡『治世之道』治邦之道』の墨家思想」(『集刊東洋学』第一二三号、二〇二〇年)によると、『治政之道』治邦之道』は墨家の思想によって構成された文献であり、墨家の「十論」のうち、尚賢・尚同・兼愛・非攻・節用・節葬・非命など、七論の所在が確認できると論じている。

【参考文献】

【論文】

- ・浅野裕一「墨家集団の質的変化―説話類の意味するもの―」（『日本中国学会報』第三十四号、一九八二年）
- ・山邊進「墨子」の天について―伝統的天観との比較を中心として―（『東方学』第八十四号、一九九二年）
- ・浅野裕一「清華簡『治世之道 治邦之道』の墨家思想」（『集刊東洋学』第一二三号、二〇二〇年）
- ・小寺敦「清華簡『邦家之政』訳注」（『東洋文化研究所紀要』第一八一号、二〇二二年）
- ・小寺敦「清華簡『治邦之道』譯注」（『東洋文化研究所紀要』第一八三号、二〇二三年）

【著書】

- ・牧野謙次郎『墨子国字解』（漢籍国字解全書所収、早稲田大学出版会、一九一一年）
- ・小柳司気太『墨子問詁』（漢文大系、富山房、初版一九一三年、増補版一九七五年）
- ・山田琢『墨子』上下巻（新釈漢文大系、明治書院、一九七五・一九八七年）
- ・浅野裕一『墨子』（講談社学術文庫、一九九八年）
- ・アンヌ・チャン著、志野好伸・中島隆博・廣瀬玲子訳『中国思想史』（知泉書館、二〇一〇年）七七頁。

（大学院博士後期課程学生）

摘要

《墨子》中的「執無鬼者」

菊池 孝太朗

戰國時期活躍的思想家集團——墨家，為維持教團內部紀律，並使其主張能應用於現實社會，提出了天志說與明鬼說作為理論依據。

在天志說中，天被視為崇尚「義」而厭棄「不義」的主宰，根據人行義與否施行賞罰，主宰世人的壽夭、貧富與治亂。墨家主張人應明察並順應天志，以實現天所期許的「義」。至於明鬼說，則將鬼神視為天神、山川之神以及人類靈魂，並論證其真實存在。墨家認為鬼神具賞賢罰暴之能，若要興天下之利、除天下之害，就必須明確闡明鬼神的存在。墨家正是藉由肯定天與鬼神等超自然力量的存在，並依靠其賞罰力量，以維繫教團與國家秩序。

另一方面，對墨家的天志說與明鬼說提出批判與反駁的「無鬼論者」，似乎早在墨子時代便已存在。這些論者在《墨子·明鬼下篇》中以「執無鬼者」之名出現，對墨子的明鬼說提出質疑。然而，對天志說與明鬼說的反對聲浪，不僅來自與墨子對立的他派思想家，甚至可能萌芽於墨家教團內部。事實上，從《墨子》諸對話篇章中可見，墨子身邊確實存在「執無鬼者」。

因此，本文將首先依據《墨子·明鬼下篇》的記載，檢視「執無鬼者」的論述，並進一步透過《耕柱篇》、《公孟篇》、《魯問篇》等《墨子》對話篇章的敘述，闡明「執無鬼者」究竟屬於何種立場，以及其主張的具體內容。